



(公財) 国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンター

「ラーク便り」 論文

→他の論文・研究ノート・小特集のバックナンバーは[こちら](#)をご覧ください。

*印刷してご利用の際は2頁目以降を印刷して下さい。

論文

宗教社会学・宗教心理学から認知宗教学への接続

井上順孝

はじめに

20世紀の最後の四半世紀とりわけ1990年代以降、脳科学、生物学、遺伝子研究などの分野でなされている研究の一部は、人間の思考や行動の理解に関して、新しい地平を開いている。それは必然的に宗教研究にも及んできている。ここで認知宗教学と呼んでいるのは、脳神経科学、進化生物学、進化心理学、認知哲学、その他の分野でなされている最近の取り組みを参照しながら展開する宗教研究の総称である。その意味では暫定的な呼称だが、それなりの研究領域の輪郭がある。欧米では認知宗教学と呼ぶ研究が少なからず存在するのに対し、日本ではそのような関心を抱く研究者自体がまだ少ない。

認知宗教学は現代の諸々の宗教現象と取り組む上で新しい視点を提供するが、それだけでなくそもそも人類はなぜ宗教を持つようになったかという大きな問いにまで関わりを持っている。現代宗教の特徴的な現象はいくつかある。19世紀以来顕著となった新しい宗教運動の形成や分派分立は世界各地で見られ、絶えることはない。グローバル化や情報化という社会全体を覆う大きな変動は、宗教にも及び、宗教の分布は非常に入り組んできた。また宗教が社会問題化したり、紛争に関わったり、政治的な問題に関わる局面も複雑化の一方である。

日本の宗教研究においてこうした現代的問題に取り組む分野としては、宗教社会学が代表的であるが、宗教人類学、宗教心理学などの分野でも取り組まれている。認知宗教学は既存の宗教研究のいずれとも接点を持つと考えるが、本稿では現代宗教を主たる対象に据え、宗教社会学、そして宗教心理学におけるいくつかの理論、学説とどう接続しているか、あるいはどのような接続のさせ方があるのかを論じる。

1. 宗教研究にとって見過ごせない研究の登場**(1) 脳神経科学等が解明していく知覚の仕組み**

人間が何かを思考したり行動したりするとき、脳内では1千億近いニューロンが活発に情報を交換している。各ニューロンは1千から1万ほどのシナプスを伸ばし他のニューロンと連結している。あることを思いついたり、言葉を発したり、身体を動かしたりするとき、脳内で何が起きているのか逐一正確に知ることなどできそうにない。しかし、そのメカニズムについては、fMRI、PET、MEGなど非侵襲的研究の方法を用いた脳神経科学の発展により、従来に比べてはるかに緻密な議論がなされるようになってきている。

知覚が脳内で驚くほど複雑な情報交換を経てできあがると分かると同時に、そのメカニズムがだんだんと解明されてきている。そこで明らかにされた知見は人文系の研究、そして宗教研究であっても見過ごせない。宗教研究においては知覚できる対象だけでなく、超自然的存在と総称される知覚できない対象と人間の関係についても論じる。知覚についての研究がどのように展開しているかには、深い関心が抱かれる。

たいていの現代人にとって、知覚情報の約8割を占めると言われる視覚を例にとってみる。人間が生きている空間は3次元である。しかし網膜にある細胞がとらえている情報は2次元である。2次元で得られた情報を3次元の情報として受け止められるようにするため、両眼の視差、身体を動かすことによって得られる動的な2次元情報、対象に関する記憶の参照などが用いられる。また形や動き、あるいは色といったものは、別々のルートで処理される。動きを伝えるのは頭頂葉を通るルート（where 経路、あるいは how 経路）だが、これは形を伝える側頭葉を通るルート（what 経路）よりほんの少し早く伝わる。進化論的な観点を導入すると、何が飛んでくるのかを察知するより、どういうコースで飛んでいるかを察知する方が生存にとって重要であったからと説明される。たとえば自分の方に飛んでくるのがミカンか石かを見分けるより、自分に当たりそうかどうかを判断する方が優先される。

視覚による認知では、それまでの経験によって得られた記憶も瞬時に参照される。目の前に斜め横にころがされた茶筒が、ちょうど短く輪切りされたような形に見えたとする。茶筒を知っている人は、それがたまたま短い輪切りの形に見えただけで、実際は長い筒状であると判断する。しかし茶筒を見たことのない人は、すぐそのような形をイメージできないかもしれない。つまり経験が対象についてその人が瞬時に形成するイメージにも大きな影響を与えている。視覚情報が最初に届く後頭部のV1と呼ばれる領域から複数のルートで伝わった情報は海馬や扁桃体、あるいは前頭葉へと伝えられる。一連の情報伝達ではフィードバックもある。まだ全容が解明されてはいないこの複雑な情報のやりとりの過程を経て、その瞬間の対象へのイメージが形成される。まさに想像を絶するような複雑な作業が瞬間瞬間に行なわれている。この複雑な仕組みゆえ、数々の錯視が生じ、誤認が生じる。「百聞は一見に如かず」という従来の視覚への信頼もかなり揺らいでくる。

多くの人にとって視覚に次いで重要な情報獲得手段である聴覚の脳内の処理過程にも、同様にニューロン同士の複雑な情報のやりとりがある。それゆえ錯視があるように錯聴も生じる。同じ物理的音がある人には快く聞こえ、ある人には不快に聞こえたりする。幻聴とか空耳という言葉があるように、その人だけ何かの音声メッセージを受けたように感じるときもある。ここにも脳内のニューロン同士の複雑なやりとりがなせるわざと、その人の経験によって生じた独特の聴覚の働き方がある。

聴覚も記憶に依存することを示したとても興味深い実験がウェブ上に公開されている¹。最初に非常に聞き取りづらい発言を聴かせる。ほとんどの人は何を言っているのか分からない。次に同じ内容のことを明瞭な発言で聞かせる。そしてふたたび最初の聞き取りづらい発言を聴かせる。そうすると、誰もがこれを聞き取れるようになる。大学の講義で何度かこの実験を試したが、皆驚いたような顔をした。つまり一度記憶に残した音声は、聞き取りにくくても聴きとれるようになる。とても特徴的な話し方をするゆえ、最初会った人は話を聞きづらく感じるような場合でも、親しい友人はきちんと聞き取るということがある。つまりその人の話し方の個性を記憶している人は、聴覚が無意識のうちに調整して聞き取っていると考えられる。見慣れたとか、聞き慣れたという表現は、記憶を知覚に参照する脳の働きについて言っているのだと理解できる。

人間は自分を取り巻く環境がどのような状態にあるかを、視覚、聴覚、嗅覚、触覚などあらゆる感覚器官を総動員して探知し、得られた情報からその時点で適切と思える反応をしながら生きている。絶えずきわめて動的に環境に対応している。知覚の仕組みがこのように解明されてきているとき、たとえば、「神を見た」、「天使があらわれて語りかけた」、「枕元に死んだ祖母の姿を見た」、あるいは「大震災で亡くなった人の幽霊を見た」といった言説の扱いは、新しい局面を迎えている。

英国のBBC テレビは2001年4月に、科学ドキュメンタリー番組『神の子』を放送した。その番

組では考古学的資料などを用いて再現されたイエス・キリストの顔が示された。黒い巻き毛、浅黒い肌、丸い鼻など中東に多く見られる特徴を持っていた。従来のイエス映画で描かれたイエスのイメージとは大きく異なった。これまでイエスを描いた絵や映画では、ほとんどの場合イエスは白人である。それぞれのイエスの顔や姿は、描いた人ごとの想像と創造によるが、キリスト教会を通して継承されたイメージの影響は疑うべくもない。BBC テレビが示した顔もあくまで推測だが、最近の諸科学の知見を採り入れているので、より蓋然性が高いと考えられる。

人間の知覚表象には文化的なものが作用しているが、それは個々人にあつて記憶として保たれ想起される。幼児期から教え込まれたイエス・キリストの表象ゆえに、ヨーロッパ社会ではイエスを白人として描くのが一般的になったと考えられる。イエスがユダヤ人であり、パレスチナ地方に育ったから、その地方に多かった風貌をしていたに違いないという発想は、一定の科学的知識を要する。この視点がイエスを画像化するときヨーロッパキリスト教世界では支配的にはならず、現代でも白人のイエス像が支配的である。

歴史的に実在した人物に対して、文化的な表象は個人の表象に強い影響を及ぼす。神、天使、悪魔、精霊、祖霊、あるいは幽霊といったいわゆる「超自然的存在」についての表象は、文化的に当該社会に継承されているものから決定的な影響を受ける。日本の神々は古代においては像として刻まれなかったが、神仏習合時代に神像が作られ、また江戸時代に浮世絵が流行すると、記紀に登場する神々の姿を浮世絵の手法で描く例が増えた。今日日本神話について解説される際、書籍やネット上に描かれる神の姿は、大半が近世に流行した描き方の影響を受けている。つまりある時期になされた文化的創造が、その後も強い影響を維持していることになる。

イメージが示されると、そのイメージのもとになるものが実際に存在するという考えに結びつきやすい。神や仏、あるいは天使や悪魔などを絵に描いたり、像に刻んだりするだけでなく、それらが自分にも何らかの形で関わりを持っているという意識的、無意識的な思考が存在すると、その属性は心に影響を持つものとなる。「神に助けられる」「神に見守られている」「神に罰せられる」などと、神をあたかも人格を持った存在のように捉える。その人の心の働きに神仏や悪霊や死霊やさまざまな超自然的存在という観念が一定の作用を持つようになる。

超自然的存在を知覚したとする種々の体験が変性意識の概念を用いて議論されたりするが、そもそも意識が何であるかについての研究は、脳神経科学などの分野でもっとも難しいテーマとされている。後述するように、意識についての統一の見解は出されていない。

脳神経科学は記憶についても新しい研究を生み出している。記憶はニューロンのネットワークによって保持されているとする見解が主流になった。一部のつながりが失われたり、別のものがつながったりすると、過誤記憶が生じる。個人の記憶も文化的に学びとったことの記憶も可変的であり、当人がそのように記憶しているからといって、実際そのとおりに起こったとは限らない。というより、その人にとって切り取られた現実であり、かつそれは時間とともに変形する。脳のニューロン同士の結合は常に変化しているから、まったく同じ状態の結合を維持できない。覚えていた筈の相手の名前が思い浮かばない。結婚して姓が変わった人の旧姓が思い出せなくなった。AさんとBさんの出身地をいつの間にか取り違えるようになった。こうしたことは大なり小なり誰も経験しているに違いない。

これが宗教研究になぜ重要かという、神秘体験がその人の記憶として語られると、多くはその記憶が確かなものとして扱われる傾向が強いためである。超自然的なものを経験は意識の働きを理解して考察しなければならないと同時に、記憶の働きを理解して考察しなければならない。たとえば

ある人が「山の頂上にたどり着いたとき、白いひげをはやした老人の姿をした霊的な存在を体験した」とその宗教体験を述べたとする。本人の理解というだけでなく、あくまでその時点における本人の記憶に依存した言説であり、それが経験を正しく再現しているかどうかは知りようがない。他者の経験は知りようがないのは神秘体験に限らないが、記憶がこのようなものだとすると、本人が明確に述べているから間違いないとする立場はとれなくなる。

(2) ユニバーサル・ダーウィニズムがもたらす視点

宗教研究は19世紀後半にダーウィンの進化論の影響を受けている。宗教進化についての議論が起こり、宗教のもっとも原初的な形態は何かについての諸説が出された。アニミズム、プレアニミズム、トーテミズムなどをもっとも古い宗教の形態とみなす研究者も出た²。だが19世紀後半から盛んになった宗教進化論は、肝心な点で進化論への誤解が混じっていた。当時の宗教進化論の1つであるタイラーの図式では、宗教のもっとも古い形態とみなされたアニミズムからフェティシズムなどを経て、多神教、一神教に至る進化が示された。このように単線的な展開を宗教進化と捉えたことは決定的な誤解である。これは宗教の歴史的展開を適切に示しているとは言えず、また宗教のもっとも古い形態を実証的に論じる困難さもあって、宗教起源論はやがて下火となった。一神教は多神教より進化しているとか、優れているといった議論も、ヨーロッパのキリスト教中心の見方であるとして、あまりなされなくなった。

生物は単純なものから複雑なものへと進化したが、複雑になることが進化と同意義ではない。肝心なのはその時、その場の環境に適応していくことである。ニッチな環境であれば適応も特殊になる。環境への適応とは究極的には生き延びることである。生物間の闘争や配偶者獲得競争もあり、自然環境への適応だけでは済まない。進化は場合によっては無駄なもの、邪魔なものさえ作り出した。進化における適応の意味を十分理解せず、直ちに宗教史の展開に応用しようとして行き詰ったのがかつての宗教進化論である。

進化論を適切に応用するなら、現在存在する宗教形態はすべて環境に適応したそれぞれの生き延びを果たしているとして理解すべきである。だとすると、現存するアニミズム、シャーマニズム、祖先信仰、多神教、一神教などと呼ばれている宗教形態すべてが、それぞれに進化した結果を示している。現在地球上にいる動物のうち約7割は昆虫とされている。現生人類などは数で言えば微々たるものである。いずれも進化の結果、変容を重ねながら種として生き延びているとすれば、昆虫の方がはるかに多様に地球の環境に適応している。同じように各種の占い、呪術的行為といったものが世界各地に見られるとすれば、それらも長い年月の中で環境に適応しながら生き延びてきたと理解しなければならない。ニッチ的な適応をしたとみなせるものもある。

進化心理学や進化生物学、あるいは進化人類学など、進化論を正確に理解し、展開させていこうとする領域が20世紀末から盛んになった。ダーウィンの発想を十分理解した上で、これを文化現象に適応していこうとする動きはとくに1990年代以降に盛んになってきた。ユニバーサル・ダーウィニズムは、進化論を生物進化だけでなく文化現象にも適用しようとする立場の1つである。この用語自体は1983年にドーキンス (Richard Dawkins) によって提起されたが、進化論を文化現象にも拡張していくやり方は、デネット (Daniel Clement Dennett) によって大きく推進された。デネットは、『ダーウィンの危険な思想—生命の意味と進化』³の中で、進化論のプロセスを生物学以外の多くの文化現象に適用できる汎用アルゴリズムに発展させた。このような発想は21世紀になって新たな展開を見せている文化進化論にも見られる⁴。

ダーウィンの示した進化の3つの前提条件は、変異 (variation)、淘汰⁵ (selection)、継承 (inheritance) である。突然変異で遺伝情報が変わり、変異同士でどれが環境に適応しているかの競争があり、生き残ったものが次世代へと継承されていく。メスーディ (Alex Mesoudi) は文化進化にもこれが適用されうると考えている⁶。文化進化にも適用しうるなら、宗教や宗教文化にも適用可能である。

遺伝子発現の仕組みを文化に応用しようとする文化的エピジェネティクスという観点も提起されている。宗教史を文化的エピジェネティクスの観点から理解しようとする試みもすでにある。エピジェネティクスは、生物学においてDNAの塩基配列を変えずに細胞が遺伝子の働きを制御する仕組みを研究する学問領域である。これはDNAが同じでも生物が環境に応じて多様な発現をする仕組みについての研究である。エピジェネティックな変化とは、遺伝子のオン、オフを制御するためにDNAに起こる化学的な修飾であり、よく知られているのがDNAメチル化である⁷。どの遺伝子にメチル化などが起こるかで、場合によっては生物にとって生命を左右するようなことさえある。エピジェネティクスにより細胞が癌化してしまうこともある。

これと類似の仕組みが文化現象にも起こるという発想に立つ進化生物学者のウィルソン (David Sloan Wilson) は、2010年に米国のフロリダ州サンアントニオに進化研究所を設立した。この研究所のサイトに、宗教的エピジェネティクスというタイトルの文章が掲載されている。次のような書き出しである。

「保守的なキリスト教派と進歩的なキリスト教派は同じ聖典を共有しているのに、どうしてこれほど異なっているのか。それは同じDNAを共有しながら、皮膚と肝臓の細胞がこれほど異なっているのと同じ理由からです。」⁸

それぞれの宗教で用いられている特別の意味を持った言葉が、もとの教典 (テキスト) において用いられている文脈から切り離され、小さな団体ごとに異なった意味で用いられる現象はありふれている。正統と異端といった分類が、多数派あるいは正統性を主張する側からの判断基準と境界線の設定であるのに対し、宗教的エピジェネティクスの観点からは、なぜそのような違いが生じたかの要因を探ることに力点が置かれる。どちらが正しいとかそうした判断とは一線を画する。その派の自然環境、社会環境への適応の結果生まれたものであるとする。

(3) 認知宗教学でまず対象とすべき現代宗教

こうした研究動向に目を向ける認知宗教学の立場は、宗教現象を他の現象と本質的に異なるものとは見なさないという点において、従来の宗教社会学や宗教心理学などと基本的に同じ土俵に立っている。信仰を持たない研究者には宗教の本質が分からないとか、宗教研究においては神とか聖なるものとかの実在を前提にすべきといった立場ではない。宗教現象とされているものも、特徴ある人間の現象、社会の現象の一つとして捉える。通常は宗教現象に含まれていないような人間の思考や活動の分析に用いられた方法を、宗教研究にも応用していくことに問題はない。重要なのは対象とした現象が置かれているコンテキストについての的確な認知である。

現代世界ではいずれの地域においても宗教分布は多様化し、また人々の生活に関わる局面も多様化している。日本では19世紀以来少なくとも千を超える新しい宗教運動が起こり、現在でもそのうちの数百の団体が活動を継続している⁹。国外からの宗教の布教も多様化している。大きくは移民の増加にともなう宗教と日本で布教を目的とした教団とに分けられる。前者の例はモスク、上座仏教寺院、ベトナム寺院、ジャイナ教寺院などの増加である。後者は法輪功、仏光山、サイエントロ

ジー、ラエリアンムーブメントなどである¹⁰。また原理主義的傾向の強い宗教団体、カルト問題を起こす宗教団体も存在する。多様化する宗教活動に対する社会的評価も肯定的なものから否定的なものまで非常に幅があり、その議論自体も複雑化している。

宗教社会学では社会の変化が宗教集団、宗教組織の形態や活動内容にどのような影響を及ぼすかに関する研究が数多くなされてきている。欧米では戦後、世俗化というテーマが大きな関心を集めた。日本では明治維新や第二次世界大戦での敗戦による社会の激変が宗教に及ぼした影響、近代化の過程で起こった都市化、産業化、私化などが与えた影響についての研究がとりわけ多い。社会変化が新しい宗教運動の形成や展開に及ぼす影響は日本の新宗教研究などの分野では中心的テーマである。逆に宗教の活動が全体社会に影響をもたらす局面についての研究も多い。宗教が政治、教育、福祉活動、出版事業など、各種の社会を推進する例などが着目されてきた。1995年の阪神淡路大震災を契機に宗教者のボランティア活動も増え、宗教の社会貢献に注目する研究者が増えた。

宗教心理学ではなぜ、どのような過程を経て、人が宗教に関わるようになるかとか、宗教は心理面にどのような影響を及ぼすかなど、心理面あるいは心の問題として宗教に関わる事柄を扱っている。とりわけ原理主義的運動やカルト問題においては、社会や文化からの影響だけでなく、人間の心理面からの考察が大きな比重を占めている。社会的に広がっている宗教との関わりに比べて、なぜそうした運動に関わるようになるかの疑問がはるかに強くなるからと考えられる。

宗教心理学や宗教社会学では、回心のメカニズム、入信や入会に関わる心理的、社会的条件、新宗教におけるカリスマ概念の適用、宗教集団類型論による活動の特徴づけ、準拠集団論や相対的剥奪理論による特定の宗教への関わりやすさの分析など、現代宗教の展開にそれぞれの焦点を見出して研究が続けられている。現代宗教をまづもつての対象とするのは、ここから宗教現象をリバースエンジニアリングするという基本的立場があるからである。現代宗教は時間軸に沿って考えるなら、これまでの宗教史の到達点ではあるが、向かい合える対象という意味では、もっとも直接的にアクセスできる出発点である。そこからどこまでさかのぼって考えなくてはいけないかを問うていく。場合によっては人類史、さらに生物の進化過程にまで視点が及ぶ可能性がある。

このことを念頭に置きながら、認知宗教学はこうした宗教社会学や宗教心理学などの分野での議論における着眼点や分析方法、あるいは見取り図などにおいて、どのような点で新しい視点を導入しうるのか。それはまた前述したような新しい研究が向かい合っている方法とどのように関係しているかを論じる。以下では回心・入信をめぐる議論、及び宗教集団論とりわけカルト問題の対象となる集団や原理主義的運動に関する議論に焦点を絞る。回心・入信に関わる問題は、宗教心理学と宗教社会学の双方で扱われてきた。また宗教集団論は主に宗教社会学で扱われてきた。両者は重なる領域もあるので、多少議論が入り組むが、これまでの学説や理論のうち、認知宗教学に接続していくのはどのような点かを以下で検討する。

2. 回心・入信をめぐる意識と記憶

(1) 宗教心理学における回心・入信研究

回心は宗教心理学では重要なテーマである。宗教学では回心を「かいしん」と読ませるが、仏教用語の場合は「えしん」と読まれてきた。特定の信仰を持たない、あるいはそれほど強い信仰心がない人が、あるときに宗教的な世界観を受け入れ、他者からは人格が変わったかのように見える場合が回心の典型である。基本的には宗教的世界に気付いたという肯定的な評価が背後にある

のが一般的である。

入信は回心を伴うとは限らず、特定の宗教的世界観を受け入れ、実践していくようになることを指す広い概念である。入会は信者になるとか会員になるとか、主として所属面での変化について言うが、入信の場合は心の変化に焦点がある。入信も多く肯定的な価値観とつながる。

他方でカルト問題が典型であるが、社会的に好ましくないという評価が広がっている団体の信念を受け入れるようになった場合は、心の変化がしばしばマインドコントロールとか洗脳という観点から議論される。布教行為も勧誘行為と表現されることが多くなる。ここには宗教全般、あるいは特定の宗教に対する社会的評価があらわれており、回心や入信に関する議論も、用語につきまとう認知バイアスへの注意が必要である。

ある人の価値観や生きざまが急に変わったり、性格まで変わったりするのは、宗教的な理由に限られていない。悪人がそれまでの自分の生き方を悔いて改めた場合は改心と表現される。非常に衝撃的な出来事を経験したり、多大な人命が失われるような災害に直面したりして、価値観、人生観が大きく変わった人もいる。自分自身でも大きく生き方が変わり、他者から見ても同じ人とは思えないくらい考えや行動が変わる現象がある。宗教的回心もこれらに通じる心的な機構によっているとみなせる。

宗教的回心とみなすのは、心の変化の内容に着眼した区分である。しかしたとえば「心の変容」といった捉え方をすると、宗教的回心だけでなく、支持政党が正反対の主張の党へと変化したり、高収入を目指す生き方から精神的満足を目指す質素な生き方に激変するなど、ドラスティックな心理的变化、社会的行動の変化として一括りにできる。短期間での根底からの変容という形式に着眼していることになる。それゆえ心の変容についての研究は宗教的回心に適用しうるし、逆に宗教的回心の研究は心の変容の議論全体に具体的素材を提供する。

回心、入信の過程で心に起きる変化についての研究として古典的であり、また今日の脳神経科学における議論を先取りしているとみなせるのは、ジェイムズ (William James) が『宗教的経験の諸相』¹¹ で示した洞察である。ジェイムズは宗教的回心をテーマに、人間の心理が大きく変わるときのメカニズムについて触れている。伝記等の記述を材料とする手記的方法をとり、それに内観法という洞察を加えた。ドイツ滞在中にヘルムホルツやブントなどの研究に接し、生理学と心理学の境界領域を志した。回心についての記述は今日でも参照すべき内容である。回心という劇的な心の変化がどのようなメカニズムであるかの分析に際しての重要な概念の一つが閾値 (threshold) である。宗教的回心はたとえば俗的な関心に満たされたように見えていた人間が、ある出来事やある時を境に、まるですっかり人が変わったように宗教的世界への関心に満たされるようになったような場合が典型的であり、ジェイムズはそこで得られる境地の1つを「聖者性」の概念で論じている。また心の変容の仕方に関して、「一度生まれ型」と「二度生まれ型」という2つのタイプを提示している。ジェイムズは宗教現象を病理とみなす「医学的唯物論」を退けつつも、宗教的経験が他のものと本質的に異なるとする価値判断を避けており、この点でも認知宗教学に接続する。

回心以前には、心の中には俗なる関心に主導された意識と、宗教的な関心に主導された識閥下 (サブリミナル) の意識とが共存していたとする。サブリミナルな意識は当人には意識されない。しかし、さまざまな経験をしながら、後者がしだいに大きな比重を占めるようになると、あるとき逆転が起こりうる。サブリミナルな意識が意識に転じるのである。従来意識は識閥下の意識となる。この逆転のポイントの指標となるのが閾値である。閾値はそこに達するまでは影響が現れない。サブリミナルな意識の強さが閾値を超えると、それが意識に転じるということになる。ある事柄が回心の理由

と見えても、閾値の観点からすると、それは最後の一押しであった可能性がある。それ以前に何が集積されていたかまで視野に入れないと、最初の一押しが何であったかだけで回心や入信の理由を深く考察できない。

この見解の先見性は、生物の情報伝達における閾値の重要性に通じている点である。ニューロンの情報伝達において、あるニューロンが発火する臨界の電位には閾値がある。他の複数のニューロンから受容した信号の合計が閾値を超えたときに、そのニューロンは次の複数のニューロンに情報を伝える。感覚器官にも閾値がある。たとえば視覚が光を捉えるときにも必要な最小限の閾値がある。網膜の光受容細胞には桿体と錐体の2種類がある。桿体は色を識別できないが、微弱な光でも検出できる。錐体は色を識別できるが、弱い光を検出できない。これは古くから体験的に知られていたのであろう。コーランの「雌牛」187節には「また白糸と黒糸の見分けられる黎明になるまで食べて飲め」とある。ラマダーンのときの明け方の基準が、白糸と黒糸が見分けられる明るさになった時だと分かる。白糸と黒糸の違いが見分けられるのは、網膜の桿体細胞が光を感知する明るさに近いとみなせる。心とニューロンのメカニズムはむろん同一ではないが、ニューロンの働きが心に関係しているとするなら、ニューロンの情報伝達の仕組みが、心の変化のメカニズムに関与しているかもしれない。

20世紀初めの回心研究には、スターバック (Edwin D. Starbuck) による統計的研究もある¹²。今日からすると、その統計的手法は偏りが生じやすいものであったが、調査結果から回心は青年期に集中する点として重視したい。これが脳の臨界期の考えを想起させるからである。視覚や聴覚などの感覚の機能や、母国語の習得に関わる神経回路は、臨界期の経験によって集中的に形成されるとする説である¹³。神経回路網の可塑性が一過的に高まる生後の限られた時期が臨界期なので、これは生涯続く学習とは異なるメカニズムである。宗教への関心を深めたり知識を習得するといったことは学習過程と同様に生涯にわたり可能である。だが、外国語学習がそうであるように、学習効果の高い時期という事柄がある。青年期は新しい思想、考えを受け入れやすく、また前頭葉の発達も青年期に完成するので、この時期は体系だった思考を受け入れるのに適しているとされる。布教を積極的に行なう宗教が、若者を対象に選ぶことが多いのは、その効果を体験的に会得しているからと考えられる。

深層心理学も宗教心理学に影響を与えた。とくにフロイトとユングの宗教現象への言及は強い影響力を持った。日本では宗教現象についてはフロイトより肯定的であったユングの理論に基づく宗教研究の方が多く、今日の脳神経科学との接続で言えば、フロイトの説の方に関心が抱かれる。フロイトの精神分析学においては、神概念が(起こったかもしれない)人類史上の出来事や幼児期の体験と関連付けて説明されている。「抑圧されたものの回帰」という表現で、無意識の中に押し込まれていたものが、形を変えて現れる。一神教の神は「殺された原父」と解釈される。この解釈をする人はフロイト派以外にそう多くないが、無意識を重視し、いわばその力に翻弄される心の働きに注目した点は留意したい。ジェイムズのサブリミナルについての考えと、フロイトの無意識についての考えは同じではないが、両者とも通常意識されていない脳の働きが、人間の意識的な行動に非常に大きな影響を与えている点に注目している。

宗教心理学で意識や無意識の働きに着目してきたこれまでの研究は、とりわけ1990年代以降に展開されている意識や記憶など、脳神経科学で示されているいくつかの知見を参照することで、新しい視野が開ける。

(2) 意識は捉え難いことを踏まえる

認知宗教学にとって意識とは何かをめぐる最近の議論は非常に示唆に富む。宗教的回心は超自然的な存在との関わりを契機とすることがある。神を見た、神の声を聞いた、神が近づくのを感じたなど、超自然的な存在を知覚したと思うのは意識の働きである。神の代わりに天使、悪魔、精霊、幽霊などの言葉を入れても同じことが言える。超自然的存在をもリアルなものとして認知させるような意識の働きはどう理解したらいいのか。

意識は脳内の複雑な情報のやりとりで生まれるようだが、意識が何であるかは脳神経科学などの最先端の研究においてもまだ謎とされている。クリック (Francis H. C. Crick) とコッホ (Christof Koch) が1990年代に提起した「意識の神経相関 (NCC: the Neural Correlates of Consciousness)」は、ある特定の意識的知覚を共同して引き起こすのに十分な、最小の神経メカニズムを想定する¹⁴。2010年代以降盛んに議論されている「グローバル・ニューロナル・ワークスペース理論 (GNW: Global Neuronal Workspace)」は、バース (Bernard Baars) が提唱した「グローバル・ワークスペース理論 (GWT: Global Workspace Theory)」を発展させたものである。意識にのぼっている情報とは、前頭前野を中心とした脳内に広く分布したニューロン集団からなるグローバル・ワークスペース内の情報にほかならないとする。トノーニ (Giulio Tononi) の「意識の統合情報理論 (IIT: Integrated Information Theory)」では、意識が生じるのは情報が統合されており、情報が構造化されていることが必要とされる。このようにいくつか興味深い仮説が議論されている。

自分が何かを知覚し、決定するとき、それは主に意識的になされていると考えられる。同時に意識されない脳内の働きがある。人間は意識されていることとそうでないことの双方から絶えず影響を受けているという捉え方は、宗教研究にとっても非常に重要である。フロイトの精神分析学においては、人間の神概念は父親殺しの無意識的願望に関わると説明されている。これは神を実体として理解している人たちにとっては、到底受け入れることのできない考えであった。ただ神概念を人間の抑圧された無意識と関連づけ、それが人類史の太古に起源を持つとする仮説は、人間の心の働きを理解しようとするときの無意識の圧倒的力を想定していた。

意識や無意識が何であるかに議論があり、それぞれの働きを明確な境界線を有するものとして取り出せないとなると、自己とか自我とかを独立した明確な部分として想定することも難しい。これに関しては「意識のホムンクルス仮説」批判がよく知られている。代表的なのは、デネットによるカルテジアン劇場批判である。デカルトの心身二元論に基づく意識のモデルが陥る矛盾を指摘している。人間の脳内に意識の主体となる小人 (ホムンクルス) が存在すると仮定すると、そのホムンクルスは人間の経験を劇場で鑑賞するかのように見ていることになり、そのホムンクルスの主体をまた考えなくてはならないことになり、論理の無限後退が生じる。

デネットは『解明される意識』¹⁵においてこのような批判を展開し、代わりに意識の「多重草稿モデル (Multiple drafts model)」を提唱した。多重的 (あるいは多元的とも訳される) というのは、脳内にはすべての情報が統合されるような場所はなく、さまざまな情報が並列的に生じてはすぐ消えていくことを指す。そして、それらの情報のうちのいくつかが言語報告を産み出したり、行動を引き起こしたりするので、これが意識内容として定着する。ただ意識内容は刻々と変化し、修正や改訂を繰り返す。それがなぜ統一的な意識の流れを作るのか。デネットは意識はヴァーチャル・マシンであるとする。並列的な脳のハードウェア処理が、直列的な流れのようにソフトウェア処理される。このような説明になると批判も出てくる。

意識が容易に変化し、多重的であったとしても、一定期間、ある意識がその人を支配するのは

確かである。これにはコッホの「勝者総取り」(winner-take-all)の考えが参考となる。人間の脳内では、常時多くの感覚情報、記憶情報が脳内で無数にかけめぐり、いくつかの意識候補が形成されるが、ある瞬間に意識を支配するのはそのうちの一つの流れであり、それ以外は意識にのぼらないという考えである。

新宗教の教祖においては、しばしば特別な宗教体験をしたことが伝えられる¹⁶。「神を見た」、「仏があらわれた」、「霊的存在を実感した」などの体験である。神、仏、霊的存在といったものは文化的表象である。その体験の表現の仕方に、日本の宗教文化として継承されていたものが影響している。文化的表象は、その人の成長過程のいずれかの時期に記憶されたものである。記憶のメカニズムの最新の研究も参照する必要がある。

(3) 記憶を対象にしている限界の自覚

宗教的回心をした人にその過程を聞くのは、回心を体験した後に過去の自分を振り返ってもらうことである。ジェイムズが用いた手記的方法でも、文字化されたそのときの記述は記憶に依存している。宗教的回心は通常は本人にとって肯定的な出来事と評価されるから、それ以前の状態は否定的とまではいかないにしても、宗教面では至らない状態であったと回顧されよう。どの宗教であれ「回心物語」の類を読むと、こうした構図が見えてくる。逆にある宗教から離脱したような場合にその理由を聞くのは、離脱した状態での過去の自分を振り返ってもらうことになる。カルト問題であれば、脱会者の発言が当該宗教組織の負の面を回顧するのは当然であろう。

これらの場合、いずれも回顧した時点での本人の記憶はおおむね正確という前提で議論される。しかし記憶に関する最近の研究を参照すると、そのような受け止め方でいいのか疑問が生じる。1920年代にドイツの進化生物学者シーモン(Richard Semon)は、記憶は脳内の特定のニューロン集団として符号化されて蓄えられると考え、エングラムの概念を提起した。学習によって活性化した一群のニューロンが脳の中に痕跡として存在するとした。1940年代後半にはカナダの心理学者ヘップ(Donald O. Hebb)が、セルアセンブリという考えを提起した。脳内、主として大脳皮質内において単一の知覚・記憶対象の表現に関与する機能的な細胞の集団と定義される。

このような先駆的研究があって、記憶が一定のニューロンの結合によって維持されるという考えが、実験によって支持されるようになるのは、20世紀末である。記憶は動画のフィルムのように蓄積されているわけではなく、ニューロン同士のネットワークの定着と組み替えとして理解すべきという考えである。これはアンサンブル・コーディングと呼ばれる。21世紀に入ると、マウスの実験によって、ある恐怖を体験したマウスの脳で活性化された扁桃体ニューロンが、その恐怖を想起したときにも再活性化されることが分かった。扁桃体は情動機能に非常に重要な役割を担っていることで知られている。どれくらいのニューロンが再活性化するかは、想起された記憶の強さと相関関係があることも示された。

記憶は記録－保持－想起という3つのプロセスで理解されているが、このプロセスにおける主役はニューロンのシナプス結合である。ある瞬間の記憶は、それぞれ異なったシナプス結合のパターンによって維持されている。1つのニューロンは複数の記憶に関わりうる。ニューロン群のシナプス結合の状態は記憶ごとに異なる。個々人が持っている膨大な量の記憶からすると、想像を絶する数の結合のパターンが介在する。さらにすべてが記録され、安定的に保持されるわけではなく、また正しく想起されるわけでもない。

記憶の可変性に関しては、ファジー痕跡理論(FTT:Fuzzy Trace Theory)という仮説があ

る。ブレイナード (Charles Brainerd) とレイナ (Valerie F. Reyna) によって 2000 年代に提唱された。FTT では「推論者は情報から逐語的、要約的表象をそれぞれ独立に抽出し、判断や意思決定においては主として要約的表象に頼る」と仮定されている。記憶の痕跡は逐語痕跡 (verbatim representation) と要旨痕跡 (gist representation) に分けられるとする。要旨痕跡はいわばストーリーの大筋をつかむような記憶であり、判断や意思決定においては、要旨痕跡に基づく要約的表象に頼るとされる。学習における記憶課題ではしばしば逐語痕跡による表象を求められる。これは正確さが要求されるため、人間にとって困難な課題である。また要約的表象は時間経過に対してより安定しており、逐語的表象と比べて操作も容易とされている。とくに重要なのは要旨痕跡に似た刺激を与えられると、それと整合するような逐語記憶を後から作り出すとする説である。これはある信念を受け入れると、過去の逐語記憶もそれに沿った記憶に書き換えられ得ることを意味する。

FTT は宗教的回心を経験する前の自分の生き方についての記憶、あるいはある団体から脱会してから入会していた当時の自分を振り返っての記憶の変化の傾向を示唆する。逐語痕跡は長く正確に保つことは無理なので、部分的に失われたり変わったりする。回心にしても脱会にしても、自分を取り巻く環境への認知は大きく変わるので、そのことが記憶にも影響を及ぼす。ある宗教に信じたのち、その宗教的指導者のある教えに強く共鳴した場合、自分の過去の生きざまも、その教えに合致させるべく記憶を書き換える可能性がある。たとえば回心に導いた人から「あなたは人を救う使命を神から与えられている」と言われたことが要旨痕跡となったとする。これまでの自分も、実はそれに沿ったような生き方をしたことがあると逐語痕跡を書き換えるようなことを想定すればいい。

過誤記憶については心理学者のショウ (Julia Shaw) が行なった実験があるが、個々人の宗教体験について記憶の検証をすることはまず無理である。当人の言ったことを経験したこととまずは受け止めるしかない。それでも過誤記憶というメカニズムがあることを知っていることは重要である。研究者の認知バイアスを反省する際にも必要になる。ショウは『脳はなぜ都合よく記憶するのか』¹⁷の中で、記憶の書き換えが人の脳の中でいとも簡単に起こっているとする。幼児期の鮮明な記憶も過誤記憶であった例が示されている。記憶は正確ではないから、宗教的体験への聞き取り調査は意味がないということにはならないが、記憶の書き換え、過誤記憶の可能性に留意することが必要となる。とくに要旨痕跡という考え方は、回心研究にとっても、また脱会者の研究にとっても考慮すべきものである。

3. 宗教集団の選択に際しての感情の影響

(1) 宗教社会学における宗教集団論

現代世界において宗教社会学の研究対象となった国や地域では、複数の宗教集団 (宗教組織、宗教団体) が存在している。また大半がキリスト教徒である社会でも、キリスト教の細かな教派まで見ていくと複数の教派が存在している。日本で大半が仏式の葬式をあげるときには宗派の違いを考慮していないが、宗を区別するなら日本仏教には大きく 13 宗があり、派の違いで分けると 150 派以上になる。それぞれが教義や実践内容等に違いがあるが、なぜある人はその宗教集団に属するようになったかについて、宗教社会学で論じられてきた。全体社会におけるその宗教集団の位置づけが着目されたり、それぞれの社会的機能の違いが着目されたりする。また全体として宗教集団に所属している人が減少すると、西欧の研究者は世俗化のテーマに強い関心を抱いた。

ある宗教が社会的影響力を強めたり弱めたりする要因としては、社会変動との関係、宗教集団の類型による違い、社会的機能の違いなどが考えられる。都市化、産業化、少子化といった社会全

体の変化は、その社会における宗教集団の活動のあり方や宗教習俗のありようにも影響を与える。一時期に多くの新宗教が形成される事態は、主として社会変化と関連づけて論じられてきた。20世紀末より世界的に葬儀の変容が顕著になり、死者をどのように葬るかの宗教習俗も、社会変化の影響により短期間に大きく変わった。インターネットが普及すると、実際に墓参りをせずバーチャル参拝をする例も出てくる。

宗教社会学においてデュルケームは宗教の機能主義的理解の創始者的存在とされる。「聖なるもの」を実体とは捉えず、象徴として捉え、社会が個人に与える影響から考えた。社会的事実とは「もののように (comme des choses)」作用するとし、宗教は次のように定義された。「宗教とは聖なる事物つまり分離され禁止される事物に関わる信念と実践に連動する体系である。」聖なるものは分離され禁止されていることで、人々を精神的共同体に結びつけるとした。

デュルケームの祖父と父はユダヤ教のラビであった。ラビは複雑なユダヤ教の戒律について深く学び、それを実践する。デュルケーム自身も13歳のときにユダヤ教の堅信礼を受けている。ラビとなることを望まれていたようだが、研究者、それも信仰とは距離を置く研究者となった。この経歴からしても、宗教の機能を社会的な次元に求めたのは必然的に思える。トラーニーには、神が定めた613の命令(ミツヴァ)が記されており、ユダヤ教は戒律という点ではおそらくもっとも細かくかつ厳しい宗教である。ラビの家に育ったなら、それが日々の生活に与える影響の大きさは実感しただろう。なぜそのような厳しい戒律を守るのか。ユダヤ教徒の家に育たなかったなら、細かい食の戒律など気にせず済んだはずである。自分の育った家族の環境、社会的環境が決定的意味を持つという見解が生まれたのは不思議ではない。

機能主義的な立場からの宗教研究は、宗教が社会で果たしている機能は何かを問う。そこでは宗教は全体社会の安定に機能するという見方が多くなされた。ウェーバーの著作を米国に紹介したパーソンズは、AGIL図式を提唱した。どの社会もその存続と発展のためには、適応(Adaptation)、目標達成(Goal Attainment)統合(Integrity)、パターン維持と緊張処理(Latency)の機能が必要とした。ここにはデュルケーム、ウェーバー、フロイトの理論の影響があり、さらに当時のサイバネティクスの発想が採り入れられている。AGIL図式では宗教は主にLの部分にあたると考えられるが、これは保守的な役割をする。従来の文化的社会的振る舞いを継続させるように働き、そこから逸脱したものが生じたときに対処しようとするからである。

宗教が社会で果たしている機能というマクロな視点とともに、社会に存するさまざまなタイプの宗教集団についての研究もなされてきた。それぞれのタイプの集団がどのような人々と関わりが深いのか、どのような状況にある人が惹きつけやすいかなどの議論もなされてきた。宗教学者のワッハ(Joachim Wach)は宗教集団の類型を合致的宗教集団と特殊的宗教集団の大きく2つに区分した¹⁸。合致的宗教集団は、家族・村落・国家などの目的に宗教的機能が合致する集団である。血縁関係に基づく集団、地縁に基づく集団、自然的な類縁(同年・同性)の基盤にたつ派生集団の3つがある。特殊的宗教集団は、社会が分化してゆき、個人や社会の宗教的経験が豊富になるのに伴って形成され、明確な教義によって構成員は相互に強く結ばれているとされた。

ウェーバーの議論を踏まえ、トレルチ(Ernst Troeltsch)がキリスト教を念頭に類型化したチャーチ・セクト論は、このワッハの区分の発想と重なる面もあるが、全体社会における宗教集団の位置づけに着目している。チャーチは、社会の支配層に結びつきが深く、社会の多くの成員がほぼ自動的に属するような宗教組織である。それに対しセクトはメンバーの自由な意思による参加が原則で、チャーチと緊張関係を生む。そもそもは西欧世界におけるカトリックとプロテスタントとの関係が

モデルにされた¹⁹。しかし米国のようにチャーチ的な宗教組織がない国では、それぞれが教派として競争状態になるとしてデノミネーションという概念が後に提起された²⁰。

さらに、社会の伝統的宗教規範から逸脱する部分があり、個人主義的で、癒しを求めるような人々が集まる傾向があるものとしてカルト概念も提起された。カルトをさらに下位区分をもうける例もあり、スターク (Rodney Stark) とペインブリッジ (William Sims Bainbridge) は、オーディエンスカルト、クライアントカルト、カルト運動の3つの類型を出している²¹。そしてカルト形成の3つのモデルとして、病理心理学的モデル、起業家モデル、サブカルチャー展開モデルを挙げている²²。チャーチ・セクト論に関連して、細かな類型も出されている²³。基本的には社会文化状況に応じて宗教集団もそのあり方を変えるという発想の上にある。

準拠集団論を基盤にした相対的剥奪理論に基づき、剥奪のタイプと入信しやすい宗教集団について論じたグロック (Charles Y. Glock) の研究がある。経済的剥奪はセクトへ、社会的剥奪はチャーチへ、有機体的剥奪はヒーリングへ、倫理的剥奪は改革運動へ、そして精神的剥奪はカルトへという図式である。これらの剥奪感は準拠集団内での比較によって生じる。分かりやすい経済的剥奪で言えば、絶対的な貧困ではなく、仲間と比べて自分が不当に不利な処遇を受けていると感じることで剥奪感が生じる。宗教によってその剥奪感を埋めようとするのは、本来の手段、つまり経済的剥奪であれば経済に関する努力では解決が見えないときである²⁴。

認知宗教学は、19世紀以来の世界各地での新宗教の形成、とくに20世紀になってからのその数の増加、20世紀の後半からの原理主義的宗教運動の増加、またカルト問題の各地での発生といった現象について、これまであまり顧みられなかった視点を導入できる。宗教が全体社会の統合にとって一定の機能を果たすという視点はこれまで盛んに提起された。他方で反社会的に思える宗教運動や宗教集団も絶えない。この理由についてユニバーサル・ダーウィニズムのような長いスパンからの視点を導入すると興味深い見解が生まれる。

(2) 現代のカルト問題と原理主義 (ファンダメンタリズム)

カルトが宗教集団の類型を示す言葉でなく、反社会的な活動をする新興の団体という意味で用いられるようになった大きなきっかけは1978年に南米ガイアナで起こった人民寺院による集団自殺事件である。集団自殺は1990年代に、太陽寺院事件、ヘブンズゲイト事件でも起こった。日本では1995年3月のオウム真理教による地下鉄サリン事件がこうした意味でのカルトが広く社会で用いられる大きな契機となった。

カルト問題になるかどうかは、集団自殺、テロ、経済的搾取、精神的呪縛などが主たる指標とされる。日本では集団自殺は1986年に和歌山市で起こった真理の友教会の女性信者7人の焼身自殺の例があるが、経済的搾取や精神的呪縛とみなされる事例が多い。通称・統一教会²⁵の一部で行なわれていた靈感商法、法の華三法行の教祖福永法源らによる詐欺事件などが代表的である。本人や先祖の霊的救い、あるいは禍を免れる手段として、高額の献金を求める行為が社会的に批判され、また裁判沙汰にもなった。

このような事件に対し、カルト (教団)、宗教カルトというカテゴリーを設けることで、宗教とは別種のものであるとみなす論者もいる。社会規範を基準にすると、ある反社会的行為を頻発するような団体を、たとえば「カルト団体」というカテゴリーに収めることはあり得る。フランスの通称「反セクト法 (la loi anti-sectes)」²⁶などは、まさにそのような視点であり、宗教団体に限らず、反社会的な団体を規制しようとする立場である。

しかしながら宗教史を振り返るなら、宗教組織が戦争、テロ、犯罪、人権抑圧などに関わった例は数限りなくあり、現在でも至るところに見出される。また初期は既存の宗教組織に対する挑戦的な姿勢が非常に強かった運動が、規模の拡大に伴い社会の中に制度化する例も少なくない。宗教は社会の秩序維持に貢献するとは限らず、活動内容はきわめて多様であるとするれば、その多様性についての議論には、ユニバーサル・ダーウィニズムなど進化論を踏まえて、人間の非合理的行動とされている面に、より多くの注意を払う必要がある。

人間の認知や行動に影響を与える感情についての刮目すべき議論が、ダマシオ (Antonio Damasio) によりなされている。ダマシオは『進化の意外な順序—感情、意識、創造性と文化の起源』²⁷の中で、ホメオスタシス概念を中心に据えながら、情動や感情が人間の行動や文化に与えた影響について考察している。宗教的信念も感情が動機になってなされた知的発明の1つとみなしている。

ダマシオは情動 (emotion) と感情 (feeling) を区別して用いている。ある出来事に直面して身体に現れる反応を情動と呼ぶ。喜び、悲しみ、怖れ、怒り、羨望、嫉妬、軽蔑、思いやり、賞賛などである。一方、感情は生命活動の状態をその人の心に告知する手段であるとする。これによって今自分の体がどんな状態にあるか、また外部環境がどのような状態にあるかを心に描けるようになった。

ダマシオが言っていることはこう解釈できる。目の前にヘビやゴキブリが現れると、瞬時に恐れ的情動が生じる。空腹時に甘いものを口にすると喜び的情動が生じる。情動は外界や身体内の変化に応じてすぐ生じる。これに対し、感情はもっと持続的である。なかなか友人ができない、職場の雰囲気かとげとげしい。それが長く続くと、毎日が息苦しいような感情を抱くだろう。あるいは体も快調で職場での人間関係も円満なら、毎日の生活が楽しいという感情がわいてくるだろう。感情は脳内の記憶も絡んで、より複雑な生じ方をする。

ダマシオは文化的な事象の形成に果たす生物学の役割に注目した研究者として、ダーウィン、ジェイムズ、フロイト、デュルケームらを挙げている。彼らは認知宗教学にとっても重要な先行研究者である。ダマシオは生物は神経系を持つと心を持つようになり、内部に感情を持つようになるとする。あらゆる脊椎動物は感情を備えている。脊椎動物の感情の話から人間の信仰に関わる感情の話までは、約5億年もの時間の隔たりがあるが、進化論の立場からは連続している。

原理主義やカルト問題に進化論の発想を導入すると、文化的バイアスの強い評価に陥るのを避けられる。社会的になされる批判は善悪など倫理・道徳的な判断基準や法的な逸脱に基づくことが多い。違法な行為、倫理・道徳的に当該社会から批判されている行動がなぜなくなるのか。これもまた宗教に限らない問題である。欲望がコントロールできないと批判されるが、コントロールできないのは理由がある。知性や理性からすると矛盾すること、ときには自らにとって社会的に負の意味を持つことをしてしまうとき、感情が大きく作用している。

ダマシオは感情は生体内の生命活動の状態を、その個体の心に告知する手段であり、ポジティブからネガティブの範囲で表現されるとする。またパーソンズが文化に与える感情の役割を軽視していると批判する。この批判は妥当で、認知宗教学は感情の役割により多くの注意を向けなければならない。ある宗教への心的イメージが人によって異なるのはどうしてか。ダマシオは心的イメージのほぼすべては内的に記録されうるとするが、その正確さはそのイメージにどれほど注意が向けられたかに依存し、そのイメージが心に浮かぶことで、どれほど情報や感情が生じたかによるとしている。これは宗教の教理的な面よりも感情に訴える面が重要であることを物語る。さほど教義を知ら

ない信者が少なくないこと、教典の内容をほとんど知らない信者もいること、他の宗教への知識はあまりないことなどは、実際に調査をした研究者なら体験しているはずである。信者を動かしているのは主として感情ではないかと感じる場面は多々ある。

ダマシオはホメオスタティックな動機付けがもっとも顕著にあらわれている宗教は仏教だとする。ブッダは「快樂は常には得られないのに、いかなる手段を使ってもそれを耽ろうとする欲望を抑制することで苦しみを取り除こうとした」とする。宗教的な信念や実践の最初の動機が、ホメオスタシスの状態の是正に関連している事は十分に考えられる。ただ、宗教において構築された知的な体系は、慰めという目的を超えて、意味の形成と探求の道具として機能するようになったとする。ここではホメオスタシス是正の要素は、痕跡として残されているに過ぎない。つまり実用的な機能を果たすことから、人間や世界に関する哲学的な探求を行なうことと目的が変わっていったと考えている。そうすると、神学的営為や宗教思想の深まりは、ホメオスタシスの観点からは関わりが薄い方向への展開ということになる。

では一部の新宗教に見られる信者の急速な広まり、宗教の違いに関わらずカルト問題が見出されること、原理主義がほとんどの宗教に観察されることなどは、ホメオスタシスとどう関わるか。新宗教の主な入信理由になる貧病争は社会問題であるが、同時に個人々人にとっては感情に強く訴える事柄である。いずれも生存の安全性に直接的関わっていて、強い情動を引き起こす問題である。また原理主義については「3つのげんてん主義」と特徴づけたことがある²⁸。「原点主義」、「原典主義」、「減点主義」のうち、減点主義は他の類似の宗教集団への批判や敵対が顕著である。また社会全体の世俗化傾向に批判がなされることも多い。カルト問題では指導者への絶対的な服従が強いられることがある。いずれも思考の深まり、合理的思考を排除し、危機感に基づいた原初的な反応を呼び起こす側面が強い。

ホメオスタシスは常に人間に働いているので、ここを刺激するようなメッセージは、感情を通して無意識的な影響力を及ぼす。仏教でいう四苦八苦の一つは「求不得苦」である。求めて得られないから苦が起る。したがって求める心を滅せよと説く。これを理解するには一定の知性なり理性の働きが必要である。教えとして貴ばれてはいるが、実践する人はほとんどいない。これに対し「教祖の教えを信じなければやがて地獄に落ちて永遠の苦しみを味わう」といった、カルト問題でよく指摘される脅迫的な文言は、感情に訴える割合が非常に高い。霊能者がテレビ番組で似たようなことを言っても心が動かされる人が出てくる。それが視聴率に影響するので、この種の番組は批判されても絶えることがない。

神経学者のハッソン (Uri Hasson) が実験に基づき論じている「脳波同調」も、宗教の説教などにおける感情の果たす役割に関連してくる。ハッソンは話の内容によって聞いている人の間で脳波同調が起きるといふこと、また話す人と聞いている人の間でも脳波同調が起きるといふことを見出した。彼が行なった実験はこうである。特徴的な内容の話英語からロシア語に訳し、それぞれのネイティブに聞かせる。聴覚野では言語が異なるため似た反応は起こらなかったが、脳の高次の領域ではストーリーに対応して同じような脳波が観察された。文法や音が違っても、話の内容が同じであれば同じ反応になることを意味する。さらに話し手は経験しているが、聞き手は経験したことがない内容の場合でも、聞いた人が話し手の脳波と同じような状態になる。彼はこうしたケースでは話し手の経験がコピーされていると解釈する。ただしそれはコミュニケーションが成り立っている場合のことであり、同じ話が異なった反応をもたらす場合についても触れている²⁹。

ここから宗教家の話の影響を考える際の聴衆の感情の動き、そしてそれに関わるストーリー内容

が重要であると分かる。論理的に筋道だっているかどうかよりも、感情に訴えるストーリーになるかどうか大きな影響力を持つ。この点は宗教家の説法のみならず、政治家の場合にわれわれが日常的に経験していることである。そしてどのようなストーリーがより強く感情に訴えるかについて、進化論的な説明の有効性が浮かび上がる。

(3) 認知のメカニズムについての進化論的理解

認知宗教学者のバレット (Justin L. Barrett) は、神の概念の普遍性を、人間の持つ2つのタイプの信念、すなわち省察的 (reflective) 信念と非省察的 (nonreflective) 信念の関係に求めている。非省察的な信念が無意識的で日常的であるのに対し、省察的信念は意識的で、ある体系だったものに依拠している。人間は片方だけで済ますことはできない。それが神の概念が普遍的である理由の1つと考えている。

バレットは進化論的な発想のもとに、*Why Would Anyone Believe in God?* という書の中で、「最小反直観的 (MCI: Minimum Counterintuitive)」及び「過敏な動作主探知装置 (HADD: Hypersensitive Agency detection device)」という概念を用いて、神概念が人間の認知にとっては自然なものであるとしている³⁰。

MCIとは反直観的ではあるが、人間の認知が受け入れられるぎりぎりのものである。ギリシア神話のように神が人間の体をして、かつ不死と捉えることや、見えない祖霊が実は存在するという観念、火山など自然物に神が宿ると考えるなどの例である。これを援用すると先祖が死後もわれわれを見守っているという実感を抱くことはMCIの一つになる。

HADDはある音や動きなどに対し、何か生き物がいると反応するようなことである。例えば森の中で枝が折れる音がしたら、生き物がいるのではないかと推測する。実際はその原因は風かもしれない、あるいは古くなって折れたのかもしれない。しかし生き物が折ったと思う方が生き延びる上で有利に働いたという理解である。進化心理学的理解であるが、こうして自然の背後に神の存在を想定する心の特質が発達したと考える。

*Ritual and Memory*³¹ の編者の1人である宗教人類学者のホワイトハウス (Harvey Whitehouse) は、宗教儀礼を認知宗教学的視点から論じた。同書では2つの宗教性のモード、すなわち写象的モード (imagistic mode) と教義的モード (doctrinal mode) を提示している。淘汰主義の考えに基づき、残っていく文化とはどのようなものかを考察している。教義的モードは、意味的記憶に依存し、より冷静で組織的で言語的である。したがって、言語的形態による宗教的教義を頻繁に繰り返すことで特徴づけられる。典礼、説教、讃歌、読誦、決まった身体的運動などは、主としてこのモードで継承されやすい。一方、写象的モードはエピソード記憶に依存し、感情的で個人的な考えがはるかに非言語的に伝えられる。まれにドラマチックな衝撃的な出来事をめぐって組み立てられる。トラウマ的イニシエーション儀礼などはこれに属する。これは少数の人の強い個人的な孤高性の基礎になることもある。

新宗教の一部にはエピソード記憶に依存した儀礼が見られる。福岡市に本部のある善隣教³²では、近年まで「ひょっとこ祭り」と呼ばれる教祖祭が行なわれていた。この名称は教祖が死が間近に迫った病床で信者たちを笑わそうとひょっとこの顔をしたのが由来である。また祭りでは教祖が苦しい「レンガの行」をした時期をしのぶため、信者たちが舞台上でその仮装をしていた³³。

1990年代に韓国のソウルでカトリック系の学校を訪問したとき、修道女が「十字架の道行」を生徒たちに体験させる授業を観察したことがある³⁴。「十字架の道行」は全体が留りあと呼ばれる14の

場面（復活を入れると15）から構成されている。メル・ギブソン監督の映画『パッション』も「十字架の道行」に沿っていて、DVD版のシーン目次は留ごとになっている。イエスが処刑されるまでの留ごとの話は、その具体的シーンを描いた人にはエピソード記憶として深く心に刻まれる可能性がある。もっとも、留の各シーンは信徒たちにとっては特別な感情を想起させるかもしれないが、信者でない人にとってはそうではない。『パッション』にしても、ただ残酷な場面だけが、十字架の道行とは関係なく、恐怖を呼び起こすエピソード記憶として残るかもしれない。感情の想起もその人の経験によって作られている認知システムの影響を受ける。

(4) 恐怖が与える影響の大きさとアージュ理論

統一教会の霊感商法問題を長く扱ってきた研究者や弁護士は、高額な献金をするようになるまでに、どのような話をするかのマニュアルができていることを指摘する。理性的、論理的に考えればおかしい話を信じ込むようになる人がいる。マニュアルがあるということは、どのような勧誘や導き方が効果的かを教団側は心得ていたことを意味する。先祖が浮かばれない、苦しむ、自分や子どもも死後苦しい目に遭うとする語りは、人間の感情に作用する。それがいかに強力な作用をするかは、カルト問題ではよく分かる。

ここで参照したいのは、認知心理学者の戸田正直が1980年代に提唱し展開させてきたアージュ理論である。戸田はアージュ (urge) を本能に近い意味で用いているが、人間の感情システムと認知システムとの関係を踏まえている。本能という言葉を避けたのは、これが一時期乱用され、科学的概念としてはふさわしくないものになってしまったからである。アージュの機能を考えた先駆者としてウィリアム・ジェイムズを挙げている。

「感情システムと認知システム：アージュ理論の立場から」という論文で³⁵、戸田はとくに「恐れ」について頁を割いているが、そこでの議論は宗教研究に直接的に関わってくる。アージュ理論の基本仮定は、感情システムが動物界で種を超えて進化してきた生き延び用のソフトウェアとする点にある。たとえば「恐ろしい」という感情はとりあえず逃走行動をとらせる。これが重要な「生き延び問題解決」機能であり、この感情の機能をアージュと呼ぶとしている。ただアージュ機能だけで感情は動いているわけではない。自分が置かれた状況を把握する「評価モニター」がある。評価モニターは「認知システム」の援助が必要になる。ここでは外部状況の認知だけでなく身体の状態もまた重要になる。外部状況と内部状況を総合して得られるものが「ムード状態」である。ムード状態は強度をもった多次元の感情変数とされる。ムード状態が形成されると個人の各サブシステムにフィードバックされ、サブシステムの状態に影響を与える。

外部状況も内部状況も多様であるから、ムード状態はほぼ無限にある。ただ似たものをまとめることで有限の領域に分割でき、その1つが「恐れ」の領域となる。人間のみならず生物にとって恐れは生存にとって必須のムード状態である。布教の場におけるやりとり、さらには宗教文化の伝達の場合全般において、恐れがどのような役割を果たしているのかは、とくに現代宗教を研究する立場からすると、きわめて強い関心が抱かれる。

戸田のアージュ理論は、サイバネティクスの考えも踏まえている。宗教の布教の場面に応用してみると分かりやすくなる。「この教えに従わないと地獄に落ちる」と宗教家に言われたときの状況を想定してみよう。地獄に落ちるという言葉は人により強い恐怖をもたらす。育つ中でそれまで聞いた地獄のイメージが思い浮かぶかもしれない。不幸な死に方をした人が身近にいれば、その人が今どうなっているかが心配になるかもしれない。そうして「地獄に落ちるのを避けたい」というムード

状態になれば、その目的に沿うような言葉に反応したり、行動を選びやすくなるだろう。地獄という言葉にそれまでよりも強い反応を示すようになる。

原理主義的傾向が強い団体やカルト問題を起こすような団体においては、信者に対する攻撃心あるいは非常な恐怖心を植え付けることがよく見られる。「悪いことをすると地獄に落ちるよ」というのも恐怖心を植え付けていることになるが、強い恐怖心を与えた後に何をさせようとするかである。「ご飯を食べてすぐ横になると、次の世で牛になるよ」というような脅しだと、つまりは賤の一環である。しかし霊能師扱いされる人物から、「高額な献金をしないと死んだ先祖が苦しみ続ける」と繰り返し言われるのは、第三者的には脅迫に等しい。

(5) 予測する脳という視点

進化論の考えでは生物はすべて環境に適応すべく進化してきたが、適応の試みは成功したり失敗したりする。成功とはその種が生き延びられたという意味であり、失敗したとは絶滅したという意味になる。絶滅した生物種は現存種よりもはるかに多いと推定されているから、その意味で進化は過酷な道である。適応するには、自分が置かれている環境への予測が不可欠である。これを前提に21世紀になって脳の予測に関する脳神経的な一連の研究が出されていることに注目したい。ユニバーサル・ダーウィニズムを踏まえた立場からは、この議論もまた文化現象への適用が可能である。

自由エネルギー原理 (FEP : Free Energy Principle) という考えを提起したのは、神経科学者フリストン (Karl J. Friston) である。19世紀の物理学者・生理学者であるヘルムホルツ (Hermann von Helmholtz) が唱えた無意識的推論が原理の元になっている³⁶。FEPは知能、知性、賢さとはどのように定義され、最適化され、実装されているかという問題に答えようとする。知能をシンプルな原理から数理的に説明しようとしている。生物の活動を総合的に論じていて、知覚と行動と学習の統一原理とされている。FEPは「いかなる自己組織化されたシステムでも、環境内で平衡状態であり続けるためには、そのシステムの (情報的) 自由エネルギーを最小化しなければならない」とする。生物の目的は感覚入力の予測能力を最大化することである。情報理論では予測の難しさをサプライズと呼ぶので、「生物の目的は感覚入力のサプライズを最小化することである」と言い換えられる。

FEPの説明ではベイズ推定への言及がある。ベイズ推定は脳の働きに関してしばしば登場し、脳はベイズ推定をするというベイズ脳仮説がある。通常の高確率と推論の仕方が異なっていて、理解されにくいところがある。ときおり直観に大きく反する結果になり、それも理解されにくい一因である³⁷。

FEPは知覚学習モデル以外にも運動学習、強化学習、コミュニケーション、精神疾患、自己組織化など様々な機能・現象をモデル化することが可能とされているので、宗教現象の理解にも及んでくる。FEPのもっとも重要な点の1つは、脳はまず予測するという点である。分かりやすい視覚の例で言うところなる。現実には何らかの対象があってそれを知覚して表象するというのが今までの理解である。目の前に丸いものがある。視線を動かすとそれが球体であると分かる。大きさや色、肌理などから判断してボールではないかと知覚する。こうして脳にボールが表象される。

これに対しFEPの考えでは、まず自分が見ているものが何であるかを瞬間的に予測する。そして視覚として得られた情報と生成したモデルとの誤差に基づいて、新しい予測を立てる。同じプロセスがくりかえされ、また誤差を測る。脳からの指令がトップダウンで、知覚からの情報がボトムアップである。このプロセスを瞬時に数回繰り返してもっとも誤差の少ない知覚に落ち着く。それがまた次の何かの予測に使われる。このプロセスは意識されない。そんな悠長なことをやっていたら、生き

抜けない。向こうから近づいているのが虎だと瞬時に認知できなかつたら、命にかかわる。大谷翔平選手の脳内でも誤差が非常に小さい予測が脳内で瞬時に生じるから、ホームランが打てる。予測能力を高めるのは生来の脳の機能に加えて練習であり経験である。

フリストンは「脳内で変化しうるすべてのものは、予測誤差を抑制するために変化する」とした。目の動きから日常生活の選択までそうである。脳の予測はその誤差が小さくなるように働いているというこの原理は、状況の把握にも使われる。そうすると人間の認知全般に関わることになる。予測する心 (predictive mind) に関する研究は2010年代から広がりを見せている。

FEPは社会学や心理学でフレームとかスキーマと呼ばれていたものを、包括的でより動的な原理として包摂している。宗教は非合理的であると言われるが、そもそも人間はいつも合理的な思考や行動に基づいて生きているわけではない。この点を明確に主張したのが、ホフマン (Donald Hoffman) のFBT定理である。FBTは「適応は真実に勝る (Fitness-Beats-Truth)」の頭文字である。人間は対象を正確に知覚できないというだけでなく、そもそも脳は正確に知覚しようとしているわけではない。われわれの認知は真実を求めてなされるわけではなくて、環境に適応するようになされるという、非常に思い切った断定である。

人間は実在を見たり感じたりしているのではなくて、実在とのインターフェースを見たり感じたりしているだけである。知覚が実在をそのまま捉えることはできず、人間独自のユーザーインターフェース (知覚系) を通して実在と相互作用する。これをデスクトップのパソコンの喩えで説明している。デスクトップは一種の実在ではあるが、そこにあるアイコンはコンピュータの中で実際に起こっていることではない。人間の知覚は正確に対象をとらえることができない弱点があるが、そもそもそのようなことを目指してはいないとする。

ホフマンは超正常刺激にも触れている。ニセフトタムシのオスがオーストラリアでスタビーと呼ばれるビール瓶を交尾の対象と誤認した例をとりあげ、たんに間違えただけでなく実際のメスよりもはるかに好んだとする。誤認するだけでなく、誤認した方を好むというのはFBT定理のマーケティングへの応用として述べているのだが、宗教現象にも適用し得る。本来自分を助けてくれるもの、たとえば実際は親ではない人を親と認知し、親以上に信頼する例は超正常刺激とみなせる。麻原彰晃は信者たちに「君たちを自分の子どものように思っている」と述べていた。尊師 (グル) は親について抱く感情の超正常刺激的機能を果たしたと理解できないか。

ホーヴィ (Jakob Hohwy) は『予測する脳』³⁸において、フリストン同様、脳はまず予測するのであるという立場を明確にしている。彼は「心は根本的に予測誤差最小化のメカニズムに他ならない」と主張する。それは「驚きを最小化すること」である。驚きを最小化するのは真の外界を認識のためではなく、自身の生存にとって都合の悪い状態に陥ることを避けるためになされる。真理を求めるとは、あくまで自分にとって都合がよいと思われる状態を目指す。まさにこの原則こそが、ときに倫理を逸脱していると批判される考えや行動、非人道的な行為を進んで行なう人間が生まれる条件になっている。

驚きの最小化において善悪の問題はどうなるか。予測誤差最小化に直接的には関わらないが、複雑な文化を発展させた人間社会では、誤差修正の至るところで文化の影響が及ぶ。社会の成員のほとんどが悪とみなしている行為を選ぶことは生きていく上でマイナスに働く場合が多い。文化は脳からのトップダウンの信号を発する際に影響力を与える。それは進化の長い歴史の中で構築された仕組みからの力には及ばないかもしれない。それでも、とりわけ悲惨な出来事に直面し、心がそれに対処しようとするとき、大きな力を発揮することもある。宗教文化もときにその役割を果たしてきた³⁹。

宗教や宗教文化についての事前の知識のあり方によって、人ごとに事前確率の様相は異なり、尤度の導き方にも大きな差がある。事後確率もまた多様になる。たとえばロシアによるウクライナ侵攻に関連して、オーストクスについてきちんと学んだとは思えないような人が、ロシア正教についての自分の見解をテレビやSNSなどで発信する。それに接した人のうち、やはり事前の知識が十分でない人がそれに影響を受ける。こちらに近づいてくるのが熊かそうでないかとの推定とは比べものにならない複雑な事前確率と尤度が存在する。SNS時代に、ときにとんでもない陰謀論集団が短期間に生まれるのは、脳の判断が直面するこれまであまり経験のない種類の複雑さが関係してくる。

むすび

認知宗教学がこれまでの宗教心理学や宗教社会学とどう接続するかについて、具体例を示しながら述べた。従来あまり参照されなかった研究—脳神経科学、生物学、ユニバーサル・ダーウィニズムなど—にも、宗教研究の深まりと広がり契機が求められる点に言及した。これらの研究を文化現象に適用すると、個人の思考や行動等に及ぼす遺伝的要因と文化的要因の相互関係が焦点になる。人間の性格や行動上の特徴について、氏か育ちか、生得的か習得的かという議論が古くからあるが、どちらか一方のみに拠ることはない。問題は両者がどのような関係で捉えられるかである。

両者の関係を掘り下げようとする研究としては、二重継承（相続）説（DIT: Dual Inheritance Theory）や二重過程論（dual process theory）が代表的である。DITはボイド（Robert Boyd）とリチャーソン（Peter Richerson）が唱えたもので、世代から世代への行動パターンの継承は、遺伝的相続と文化的相続の両方が関与するとする⁴⁰。両者は独立しているのではなく、文化的相続のパターンは様々な遺伝的要因によって規定されるとして、その規定のされ方が関数的に議論されている。スタノヴィッチ（Keith E. Stanovich）の二重過程論では人間の行動、思考を左右するものが3層で考えられている⁴¹。遺伝子的レベル、ミーム的レベル⁴²、そして前頭葉における思考のレベルである。スタノヴィッチの議論のポイントは、人間が遺伝子とミームの二重の操作を受けているとし、かつそれでも理性的に判断できる部分はどこにあるかを問い続けていくところにある。宗教はミームの一種としてみなされるが、同時に遺伝子的レベルの命令にも関係するとされている。

スタノヴィッチが二重過程モデルで最終的に問題としていることは、ある決定が個体の利益になるかならないかである。これだけを取り出すと、ものごとの善悪を判断する際によく示される基準だが、自分の利益のつもりが遺伝子やミームの利益であることが多いというのがポイントである。遺伝子やミームの利益とは、つまり多くのコピーが可能になるということである。個体の利益が実は遺伝子やミームへの奉仕であって、個体の利益にはならないという例は、たとえば殉教を説く宗教などであるとされる。「国のために命を捨てよ」と説くことも同様の類になると考えていい。

スタノヴィッチは認知バイアスに触れているが、認知バイアスの問題は宗教研究には非常に重要である。宗教行動は非合理的なものであるとする議論がしばしば見受けられるが、仮にその非合理性が宗教以外の行動における非合理性と同じメカニズムなら、宗教行動の非合理性を特別視する必要もない。宗教行動が認知的バイアスと関係を持っているという視点を導入すると、あることを信仰するようになった理由、入信したり脱会したりするときの理由、宗教を嫌う理由などの説明として認知バイアスを加えうる。明らかに不合理に見える人間の行動も、百万年単位での環境への適応という観点からすると、必要があつて生じたバイアスであるとみなされる。

脳の予測は所与の環境における生き延び策に基づく。アルゴリズム的処理は合理的かもしれない

が、時間がかかり脳に負担がかかる。多少の誤差はあっても短時間でのヒューリスティックな処理の方が、生き延びる上では有利に作用する。宗教への関わりに際しても、多くの場合に脳の予測がヒューリスティックであることは疑いを入れたい。どのような予測が個人や社会にとって長い目で見て危険であり、好ましくかの判断は文化ごとに蓄積されている。

しかしその宗教文化の利用もまたヒューリスティックな場合が多いとすると、現代宗教の分析に際しては二重の注意が常に必要になる。1つは人間の無意識的選択、特に感情に基づく反応には長い時間をかけてきた適応のための仕組みが作用していること。もう1つはそれぞれの宗教文化にもまた、合理的理性的な営みとして長い時間をかけて蓄積された部分と、人間の遺伝的傾向に大きく引きずられた部分とがあることである。非合理に見える思考や行動を理性的な判断で克服するのは、ユニバーサル・ダーウィニズム的な視点からしても限界がある。FBT定理の立場からも同様である。この限界の自覚こそが宗教を議論する際にも重要である。

ここで取り上げた理論や学説等を参照するならば、認知宗教学は現代宗教を心理面、社会面、さらに文化面において論じる場合に、感情が果たす役割や環境への無意識的な適応をより重視することになる。社会の変化、環境の変化が宗教のあり方に影響を与える点への着目そのものは、宗教社会学や宗教心理学と同様である。しかし、なぜその宗教が選択されたのか、あるいは破棄されたのかという局面においては、選択に働く無意識的な力と、そして状況への無意識的な適応により多くの注意が当てられる。無意識的な心の働きは遺伝的に組み込まれたものに影響されているし、文化的に継承されたものも意識されないままに力を発揮することに絶えず留意する。

認知宗教学の立場からする現代宗教の事例研究は、宗教現象のリバースエンジニアリングに資するし、人間の心の働き、社会現象や文化現象のより多様な理解にも資する。現代宗教のリバースエンジニアリングは心理的、社会的、文化的次元のそれぞれに展開しうる。また宗教現象を他と本質的に異なる現象とはみなさないゆえ、現代宗教の認知宗教学な視点からの研究は、脳神経科学、生物学、認知科学系の諸研究との接続点も提起しうる。ここでは紙数の関係で言及しなかったが、たとえばプロジェクション・サイエンスにおける宗教研究なども議論は共有しうる⁴³。

欧米における認知宗教学関連の研究においては、宗教を一神教を典型として考察しがちになる。アスラン『人類はなぜ〈神〉を生み出したのか?』⁴⁴や、ノレンザヤン『ビッグ・ゴッド』⁴⁵もそうである。日本の現代宗教を出発点とする研究では、東アジアの多神教そして重層信仰に関する議論にも広く目を配った認知宗教学の展開が可能である。

註

- 1 右のサイトを参照 <https://illusion-forum.ilab.ntt.co.jp/noise-vocoded-speech/index.html>
- 2 これを学説史的な視点から分かりやすく述べたものとして脇本平也『宗教学入門』講談社、1997年がある。
- 3 『ダーウィンの危険な思想—生命の意味と進化』青土社、2001年。原著はDaniel C. Dennett, *Darwin's Dangerous Idea: Evolution and the Meanings of Life*, Penguin Press, 1995。
- 4 宗教学、宗教社会学における進化論への対応を論じたものに、藤井修平「時間性の言説としての宗教進化論の系譜」『宗教研究』90-1、2016年がある。
- 5 selectionは選択、競争とも訳される。また近年variationは多様性あるいは変動と訳される場合もある。
- 6 アレックス・メソーディ『文化進化論：ダーウィン進化論は文化を説明できるか』NTT出版、2016年。原著はAlex Mesoudi, *Cultural Evolution: How Darwinian Theory Can Explain Human Culture and Synthesize the Social Sciences*, University of Chicago Press, 2011。
- 7 これはメチル基（炭素原子1つと水素原子3つで構成）がDNAに結合されることで、メチル基が遺伝子上

- にあると、その遺伝子の発現抑制（サイレンシング）がなされる。その遺伝子からタンパク質が合成されなくなる。ほかにヒストン修飾もある。
- 8 右のサイトを参照。 <https://thisviewoflife.com/religious-epigenetics/>
 - 9 このうち宗教研究者の調査対象となっているものだけで300を超す。井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教教団・人物事典』弘文堂、1996年を参照。
 - 10 宗教情報リサーチセンター編『日本における外来宗教の広がり—21世紀の展開を中心に—』宗教情報リサーチセンター、2019年。なおデジタル版は下記のURLからダウンロードできる。
http://www.rirc.or.jp/20th/Rirc20th_inbound.pdf
 - 11 『宗教的経験の諸相』岩波書店、1969年。原著 William James, *The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature*, Longmans Green & Co., 1902。
 - 12 スターバック（1866-1947）はクエーカー教徒の家に生まれた。回心と習慣放棄との類似性を指摘している。分離と再統合という見方をしている。回心調査では1,265人を対象とし回心の平均年齢は16.4歳としている。
 - 13 動物学者のコンラッド・ローレンツの研究で有名な「刷り込み」も親鳥を認知する上での臨界期があることを示したものと理解されている。
 - 14 コッホの意識についての基本的見解は、クリストフ・コッホ『意識の探求 上・下』岩波書店、2006年を参照。原著は Christof Koch, *The Quest for Consciousness: A Neurobiological Approach*, Roberts & Co., 2004。
 - 15 『解明される意識』青土社、1998年。原著は Daniel C. Dennett, *Consciousness explained*, Little Brown & Co, 1991。
 - 16 どのような例があるかは、井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教教団・人物事典』弘文堂、1996年の人物篇の各項目を参照。
 - 17 『脳はなぜ都合よく記憶するのか』講談社、2016年。原著は Julia Shaw, *The Memory Illusion: Remembering, Forgetting, and the Science of False Memory*, Random House, 2016。
 - 18 Joachim Wach, *Sociology of Religion*, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., 1947。
 - 19 トレルチはチャーチ・セクトに加え、神秘主義という区分も提起した。
 - 20 デノミネーションの概念は、リチャード・ニーバー（Helmut Richard Niebuhr）の提起した議論が元である。
 - 21 これについては三木英『宗教集団の社会学—その類型と変動の理論』北海道大学出版会、2014年を参照。
 - 22 William Sims Bainbridge & Rodney Stark, “Cult Formation: Three Compatible Models,” *Sociological Analysis*, 40, 1979。
 - 23 インガーはさらに細かく6区分をもうけている。普遍的チャーチ、エクレシア、デノミネーション、制度的セクト、セクト、カルト。
 - 24 興味深いことだが、宗教は貧病争の解決であるとした世界救世教の教祖岡田茂吉の主張は、剥奪理論と発想が似ている。
 - 25 1964年に世界基督教統一神霊協会として宗教法人として認証されたが、2015年に世界平和統一家庭連合と改称。
 - 26 正式名称は「人権並びに基本的自由を侵害するセクト的運動の予防並びに抑制を強化することを目的とする法律」であり、2001年5月30日に国民議会で可決された。
 - 27 『進化の意外な順序—感情、意識、創造性と文化の起源』白揚社、2019年。
 - 28 井上順孝・大塚和夫編『ファンダメンタリズムとは何か』新曜社、1994年を参照。
 - 29 ハッソンの見解は、ウェブ上で公開されているTEDの番組で示されている。下記のURLを参照。 <https://www.youtube.com/watch?v=FDhlOovaGrI>
 - 30 Justin L. Barrett, *Why Would Anyone Believe in God?*, AltaMira Press, 2004。
 - 31 Whitehouse et al. eds., *Ritual and Memory : Toward a Comparative Anthropology of Religion*, AltaMira

Press, 2004。

- 32 善隣教は1947年に設立された神道系新宗教。教祖は力久辰斎（1906-77）。
- 33 これは1987年に善隣教の教祖祭の参与観察をしたときに確認した点である。
- 34 この調査は國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクトによってなされたもの。韓国のキリスト教系、仏教系、圓仏教系の中学校、高校を調査した。
- 35 『認知心理学研究』3-2、2006年。
- 36 ヘルムホルツは「ヒトの感覚は不完全なため、無意識的に推論を行ない、不足した情報を補っているはず」と考え、これを知覚の本質とした。先に述べた視覚や聴覚などの不十分さが無意識的に補われている話である。
- 37 常識に反する例としてよく引き合いに出されるのは次のようなものである。ある地域に伝染病が流行した。人口約10万人のその地域の1,000人に1人が感染していることが分かった。感染しているかどうか病院で検査を受けることができるが、陽性と判断された人でも1%は実際は陰性である（偽陽性）。また陰性と判断されても1%は実際は陽性である（偽陰性）。かなり精度が高い検査とはいえ、わずかな割合で偽陽性、偽陰性という間違いが出るとする。さてここである人が自分が感染しているかを知ろうと検査を受けたところ、結果は陽性であった。ではこの人が本当に陽性（真陽性）である可能性はどれくらいであるか。直観的には99%ではないかと考える人が少なくない。しかしベイズ推定に基づく、この場合検査で陽性と出た人が真に陽性である可能性は約9%である。それはおかしいと思う人がけっこういそうな数字である。だが実際に感染している人が、その地域では1,000人に1人、つまり0.1%という事前確率が大きなポイントである。感染している人とそうでない人の割合は、この地域では100人と99,900人になる。検査を受けた人が陽性であった場合、その人が100人のうちの99人（真陽性）に入るのか、99,900人のうちの999人（偽陰性）に入るのかというふうにはベイズ推定では考える。実際に陽性である確率は99人+999人、すなわち1,098人のうちの99人であるから、 $99 \div 1098$ で約9%となる。
- 38 ヤコブ・ホーヴィ『予測する心』勁草書房、2021年を参照。原著はJakob Hohwy, *The Predictive Mind*, OUP, 2013。
- 39 個体と環境の問題だけでなく、個体同士の問題に話を広げると、ある挙動の有利さは他の個体の挙動によって変わるとしたメイナード＝スミス（John Maynard Smith）のESS（Evolutionary Stable Strategy）という視点も必要になるが、ここには踏み込まないでおく。
- 40 Robert Boyd and Peter Richerson, *Culture and the Evolutionary Process*, University of Chicago Press, 1985。
- 41 キース・E・スタノヴィッチ『心は遺伝子の論理で決まるのか——二重過程モデルでみるヒトの合理性』みすず書房、2008年を参照。原著はKeith E. Stanovich, *The Robot's Rebellion: Finding Meaning in the Age of Darwin*, University of Chicago Press, 2004。
- 42 ミーム論はドーキンスの発想から展開しており、ユニバーサル・ダーウィニズムにおいてはしばしば言及される。宗教研究においてミーム論がどう関わるかについては、拙論「新宗教研究にとっての認知科学・ニューロサイエンス」『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報第5号』2012年、及び「現代宗教は古代宗教と何が違うか？—宗教進化論再考—」『國學院大學研究開発推進機構紀要第8号』2016年を参照。
- 43 これに関しては、鈴木宏昭編『プロジェクション・サイエンス—心と身体を世界につなぐ第三世代の認知科学』近代科学社、2020年を参照。
- 44 レザー・アスラン『人類はなぜ〈神〉を生み出したのか？』文藝春秋、2020年を参照。原著はReza Aslan, *God: A Human History*, Random House, 2017。
- 45 アラ・ノレンザヤン『ビッグ・ゴッド：変容する宗教と協力・対立の心理学』誠信書房、2022年を参照。原著はAra Norenzayan, *Big Gods: How Religion Transformed Cooperation and Conflict*, Princeton University Press, 2013。